される日の遠い將來に於てにしても果して來るかどうかは甚だ覺束ない事のやうに思はれる。人間の性質が殆んど一變する迄に善良になるか古代の氏族共産時代のやうな單純なナイーブな狀態に歸るかするに至らなくては殆んど不可能のことの樣に思はれる。それに共産社會がたとへ實現したにしても、若し蟻の共産社會のやうに固定したものになつて進化が却つて停止する事があるとすれば、平安であり、調和があり統一がありして、一面からは幸福であると見られないこともないが、然しそれは寧ろ悲しむべきことゝなる。そは死の如き安らかな幸福である。社會組織が餘りに機械的になるとすればそは個性の滅び去つたときである。

共産主義にしても集産主義にしても、それを餘りに徹底せしめようとすれば、機械的な組織を齎らす事になる。集産主義は國家社會主義に外ならないのであるから、吾々のやうに個性の自由を重んずる立場にある者は、初めから反對せざるを得ないのであるが、然し共産主義の中にはなほ吾々の多く學ぶべき眞理の存する事を、決して吾々は無視して了はうとするものではない。其點を誤解してはならない。各人がその能力に從つて働き必要なだけを與へられる社會に於て、各個人に自發的ならしめる刺戟を與へるものがあり、以て單調化することなく、各人の自由と創意、即ち個性が重んぜられ常に活氣を呈してゐるものとすれば、それは確かに理想的社會ではあるが、吾々にはまだそれに對してすつかり信頼することの出來ない點の存するのを如何ともすることが出來ないでゐるのである。で、私が今日までに到達した思想に於ては、必ずしも共産主義をそんな風にまで徹底せしめる必要を認めないのである。寧ろ個性の自由を重んずるところから、ある程度迄の私有財産制を認めなくてはならない必要を感じてゐるのである。それは到底無視することの出來ない人間の本能の上に根ざしてゐるやうに思はれる。吾々はこの人間の本能に根ざしてゐる所有慾を正常でさへあるならば、そんなに惡いものであるとは考へない。只それが正常の範圍を越えようとするとき十分阻止することが出來る樣になつてゐればよい。

吾々は絞取の根原を、私有財産そのものにあるとは見ずして、私有財産が惡用せられたり、また法律に依つて特殊の權利が賦與されたりして、その爲に、地代、利子、利潤が可能にされてゐる所に存するものと見るのである。されば私有財産の廢止でなく、地代、利子、利潤の徹底的廢止が肝要なのである。

私は初め地代、利子、利潤の全廢を主張した時には、タッカーの說は全く知らずにゐたのであるが、近頃タッカーの說を知るに及んで、その主張點の甚だよく似てゐるところのあるのに、益々力を得たる感じがする。

廣い範圍に亘る徹底的な共産主義の社會は、實現の甚だ困難なものであると共に、個人の自發的な自意的なところに根ざして自然に建設されたものでなくて、强ひて出現せしめようとすれば、何等かの權